

令和3年度中間市総合教育会議録

- 1 日 時 令和4年3月23日（水）13時15分
- 2 場 所 別館3階 特別会議室
- 3 出席者 市長 福田浩
教育長 片平慎一
教育委員 河本直子、衛藤修身、佐野正靖、太田かおり
- 4 欠席者 なし
- 5 事務局 教育部長 船津喜久男
総務部長 末廣勝彦
市長公室長 田代謙介
学校教育課長 松永嘉伸
学校指導課長 森秀輔
教育施設課長 北原鉄也
生涯学習課長 米満孝智
学校指導課課長補佐 掛橋賢議
生涯学習課課長補佐 田代磯政
学校教育課教育総務係長 野中康伸
学校指導課指導係長 元嶋崇彰
- 6 傍聴人 6人
- 7 議事日程 別紙のとおり
- 8 議事次第 別紙のとおり

中間市総合教育会議事日程

令和4年3月23日（水）13時15分

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 議事
 コロナ禍における学びの保障について
- 4 市長のことば
- 5 教育長のことば
- 6 閉会

[開会時刻：13時15分]

- 船津教育部長 | みなさんこんにちは。私は本日の進行を務めます教育部長の船津でございます。よろしくお願いいたします。
- ただいまから令和3年度中間市総合教育会議を開催いたします。
- 会議次第により会議を進めさせていただきます。最初に福田市長からご挨拶をお願いいたします。
- 福田市長 | 本日はお忙しい中、皆様には令和3年度中間市総合教育会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。時間も限られておりますので、私の挨拶は短めにしたいと思います。
- 教育委員の皆さまの忌憚のないご意見を聞くために、一言だけご挨拶申し上げます。
- 今日は「コロナ禍における学びの保障」が題材でございます。どうか事務局の説明をお聞きになって、これからの中間市の教育のあり方、これを皆様の忌憚のないご意見を聞かせていただきたいと思います。以上です。
- 船津教育部長 | ありがとうございます。それでは、これより議事に入らせていただきます。
- 議事につきましては、中間市総合教育会議設置要綱第4条第1項の規定によりまして、福田市長に進めていただくことにしております。
- それでは、福田市長よろしくお願いいたします。
- 福田市長 | ご指名によりまして、司会を務めさせていただきます。司会は不慣れなものですからよろしくお願いいたします。
- それでは、次第に沿って議事を進めさせていただきます。
- 「コロナ禍における学びの保障について」説明をお願いいたします。
- 片平教育長 | それでは学校指導課から説明をお願いいたします。森課長。
- 森学校指導課長 | 学校指導課の森でございます。
- こちらのモニターを使いましてご説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。
- それでは、「コロナ禍における学びの保障」と題しまして、この1年間の学校の教育活動について、学校指導課からご説明いたします。
- まず学校の状況についてご説明いたします。

今年度の市内小中学校における新型コロナウイルス感染症の状況ですが、夏休み明けのデルタ株、1月から2月のオミクロン株への置き換わりにより、児童生徒の罹患も急増しました。それに伴い、学級閉鎖についてもご覧のとおり小中学校で実施されております。また学年閉鎖も小中学校それぞれで1学年ずつ行われましたが、各学校の適切な対応により、学校全体を閉鎖するというところまでには至りませんでした。2月の下旬からは、子どもたちの感染も減少してきております。

これに対し教育委員会としましては、学校との連携を強め、文科省及び県教委等の通知に基づいて、ご覧のような感染対策を行ってきております。さらに、感染拡大期には、通常対策に加え、昼休みの短縮や部活動の中止、学習活動の制限などを行い、より対策を強化してまいりました。

このような中での児童生徒の学力の状況ですが、全国学力学習状況調査の結果を見ますと、小学校では国語・算数ともに全国平均を上回りました。また、中学校でも、国語・数学ともにほぼ全国平均に並ぶことができております。下段の折れ線グラフは、直近3年間の学力の推移です。ご覧のとおり学力が向上してきていることが分かります。

このように全体が向上してきていることが分かっていると思います。このように全体が向上してくる中で、低位にいる児童生徒への指導の充実がこれからの課題と捉えております。

また、小学5年及び中学1・2年を対象に実施している福岡県学力調査の結果を見ますと、小学校・中学校ともに県平均に届いていません。しかし、このグラフは小5から中1にかけての同一集団の変容を表していますが、こちらから、同じ子どもたちを見ると、着実に伸びてきていることが分かります。これらことから、小学5年初めの時点での学力、つまり小学校低学年から中学年にかけての学力を確実に身に付けさせることが課題と言えます。

このような中、子どもたちの学びを保障するために、学校は様々な取組を進めてまいりました。その一端をご説明します。

まず、子どもたちの学校生活の基盤となる学級集団づくりのために **hyper Q-U** というアセスメントを活用しています。これは、学級の状況を客観的に診断・分析するもので、コロナ禍において、担任からは見えにくい心理的な部分や人間関係等を知ることができ、学級の状態の改善に生かされています。

続いて、学力向上の取組についてです。ご覧のように、各学校で、学校の状況に応じて、様々な学力定着のための取組が行われております。例えば、西小では、学級に問題集を多数用意しておき、子どもが自分でやりたい問題集を選んで持ち帰って家庭学習を行うという、家庭学習の取組がなされています。

東中では、定期考査の後に、学年で課題となった問題を中心に再度取り組み、

課題解決を目指すフィードバックテストが実施されています。また、様々な制約が発生するコロナ禍において、昨年度末に整備していただきました一人一台端末を活用した取組も進んできました。

こちらは、学級閉鎖の際のオンラインによる朝の会の様子です。中間小5年生の学級で、担任がiPadを通じて、児童一人一人の顔を見ながら声をかけ、健康状態や不安なことなどの聴き取りを行いました。その様子をご覧ください。

《 動画 》

他にも、各学校において工夫を凝らした様々な取組が行われています。南小では、学校に出てこられない子がiPadを通じて授業に参加し、Googleのclassroomというアプリを使って学習課題を提出するという取組が行われました。また、中間中では、授業の様子を録画し、DVDにして生徒に届ける等の取組もなされています。

さらに、iPadに入っているアプリを活用し、オフラインでの学習課題を提供するなど、iPadを使った学習支援の取組が広がってきております。

もちろん、全てにおいてICT化を目指すのではなく、紙媒体とICTのそれぞれの良さを踏まえ、児童生徒の発達段階に応じた学習支援を行うことが重要と考えております。

さらに、企業との連携や寄付等のご支援のもと、より充実した教育活動も進められております。

こちらは、ソフトバンク社の人型ロボット Pepper を使ったプログラミング教育の授業の様子です。子供たちがiPadで作ったプログラムで、Pepperを動かす様子をご覧ください。

《 動画 》

こちらは、リビングロボット社のメカトロウィーゴを使った授業です。子どもたちが、どうすれば自分たちが思ったような動きができるか、友達同士で話し合いながらプログラミングを行い、確かめる様子をご覧ください。

《 動画 》

その他にも、近年大きな課題となっている夏の熱中症対策として、大塚製薬との連携により、熱中症についての教員研修も行いました。

さらに、オンラインでの学習支援のためのツールとして、学研の学習教材のニ

ユーコースや LITALICO という企業の特別支援教育のための教材なども活用し、学校での ICT を活用した取組を進めています。

また、コロナ禍で大きな制約を受けた部活動についても、ICT 活用の取組が進んでいます。この写真は、吹奏楽部の生徒が Google の Meet を使って、オンラインで合同練習を行っている様子です。

それから、東中では、教員に配布された一人一台端末を使って、職員会議のペーパーレス化も進められています。資料の印刷等に係る時間をなくすことにより、教職員の負担軽減と紙の節約につながっています。

このように、様々な取組が進んできており、今後、ますます充実していくと考えています。

この1年間、コロナ禍の非常に厳しい状況の中ではありましたが、教育委員会と学校の連携した取組により、児童生徒の学力が向上し、生徒指導面でも学校が落ち着くなどの成果が見られます。

課題としましては、今後もコロナ禍が続くと思われる中で、いかに総合的な教育力を高めていくかということになると考えています。

そのためには、先ほど述べましたように、特に低学年の時期からの学力格差に対応するため、就学前の段階からの保護者への啓発や、今後 ICT の活用がさらに進んでいくことから、家庭のネットワーク環境等のインフラ整備がますます求められると考えております。

以上で、学校指導課からご説明を終わります。

福田市長

ただいまの分かりやすい説明、ありがとうございました。

台本によりますと私の意見となっておりますが、私が喋ると時間が終わってしまいますので、早速教育委員の皆様にお話を伺いたしたいと思います。

それでは、まず河本教育委員さん。

河本教育委員

コロナ禍における学びの保障ということで説明いただき、いろいろ取り組んで頑張っているという点です。大変ありがたく思っております。

保障ということで、一番保護者が心配しているのは、やはり高校入試に対応できるか、遅れをとらないかということだと思います。その辺を気を付けていただきたいということと、今説明があったことをやってらっしゃるので、学力も上がっていますし、問題もないので、これからはそのようなことに気を付けていただきたいと思います。

1つ気になるのが、学力も大切なのですが、今は核家族になっています。保護者が学力に執着するあまりに、最初は子ども可愛さにやっていたと思うのですが、勉強を無理矢理やらせたりなど、それが虐待に繋がることがあるとニ

ユースであってました。

そのような情報を持っていないものですから、私の子育ての時のことを考えても、よく周りの友達と話していたのが、長女や長男というのはどうしても親が力が入りすぎて、委縮させてしまい、つい「勉強しなさい。」と怒ってしまうということなのです。

そういった情報がない中で、お稽古の先生から言われた一言が、「あなたはひとり親家庭だから。男性というのは、子どもを長い目で見ることができる。だけど女性は、今の状態しか見ることができない。子どもというのは今の成績が悪くても、先で伸びる可能性を持っています。だから今の状況で判断しない方が良い。」と言われました。その言葉は本当にありがたかったです。その言葉がなかったら、もっと子どもに厳しく接してきたかもしれません。おかげさまでその言葉によってブレーキがかかりました。それでもやはり子どもに言わせると、厳しい親だったみたいです。そういったことを啓発したりできるような取組をお願いしたいと思います。子育てに対してそういう情報を共有できるような場を作っていただけたらと思います。

もう1つ別の話になりますが、以前研修で春日市に行ったときに、出前トークで市長と生徒が直接話をするということをやっていて、どのようにしたら市が良くなるのかという内容でした。例えば、もっと南福岡へ行くバスの量を増やしてほしいなど、いろいろな意見を子どもたちに出させて、それが可能であれば実際に市がそのことに取り組んだりするとのことで、そのことによって、すごく自立した生徒が出ているということをおっしゃっていました。

中間市においては、市長は以前タレントをされていますし、そういうことは非常に子どもたちにとって興味のあることなので、そういった経験を含めてお話しされたり、これから学校の再編の話に対しても、やはり大人だけではなく、子どもの気持ちというのも加えていただきたいと思います。

今はコロナ禍で無理かもしれませんが、コロナが落ち着きましたら、そういうことを中心になさってはどうかと考えました。

福田市長

ありがとうございます。

私も次男でございますので、ほったらかしにされた男です。ですから、よく分かります。兄貴は本当に親からいつも叱られているような感じで、僕は逆に全然何も言われなかったから、このような性格になったと思います。それと、出前講座等もコロナが明けましたら、要するに市のシビックプライドというのを子どもたちに広く持ってもらうために、いろいろと今後やっていきたいと思っております。

それでは、次のご意見を太田教育委員さんお願いします。

よろしく申し上げます。

まずコロナ禍における学びの保障ということで、コロナも今度の4月で3年目を迎えます。先生方も子どもたちも、少しずつコロナに慣れてきたと言いますか、コロナ禍の中でどう過ごしていくかということに慣れてきていると思います。もちろん三密は継続しながらなのですけれども、その中でもできることが分かってきていますから、今までになく、より良い教育の充実といったところを、ICT等を活用しながらやっていけると良いと思っています。

まず、学級運営を充実するという事です。コロナ禍ということで、今回マスクも外せませんし、三密ということが言われていますので、先生と子ども、それから子どもたちの間の距離感がどうしてもある2年間だったと思います。距離を保ちつつではあるのですけれども、やはりそこで人間関係の構築が希薄になるというようなことが、どうしてもあっているのではないかと思います。かと言って、距離を今までどおり全開にするわけにはいきません。今ご紹介がありました **hyper Q-U** を使った学級集団づくりというのを、中間市は取り組まれているということですので、素晴らしいと思っています。

併せまして **Google の Classroom** を中間市は導入されています。ここのミントの機能を使って時間を設けて、例えば自宅から先生とつながりながら、まさにマスクを取って顔を見ることができるということが、中々いま教室ではないので、ここで対面ではないけれども **face to face** で顔を見ながらオンラインでつながって、自由に語り合えるようなそういう時間を取ったりすると、子ども同士とか先生と子どもの距離感が縮まって良いのではないかと感じたりしました。

それから、学習習慣の形成ということで、これも家庭学習の支援に中間市は力を入れられていて、全国学力調査でもここ2年、学力が伸びております。本当に教育長はじめ皆さんや現場の先生方のご指導の賜物だと思います。

さらに伸ばしていくということでいきますと、やはり学習習慣の形成というのは本当に小学校の時代から作らないと、中学、高校に行っても中々付かないものです。やはり小学校の頃は遊ぶことも大事なのですけれども、ある一定時間は必ず学習をするという習慣形成に力を入れていくと良いと思っています。そういうサポートを担当の先生を中心にやっていかれると、中学、高校になった時に、子どもたちの学力がもっと伸びてくるのではないかと思います。

それから、プログラミング教育ということで、これも素晴らしい取組だと思います。まさに、デジタルネイティブと言われている時代の子どもたちですので、早い時期からこういった iPad だとかパソコンだとかに触れるということに、さらに力を入れていって、プログラミング能力の開発と育成に力を入れていく

と、これは中間市の1つの教育の売りになるのではないかと思います。
そして、子どもたちにiPadが一人一台ずつ渡っていると思いますので、今後はこれをさらに、特に新年度は、先生方の教育や研修がこれから行われるとお聞きしておりますので、やはり指導者の育成をしつつ、教室の中で効果的に活用してくということを進めていくと良いと思います。
併せてiPadの場合は無料のソフトも沢山ございますので、そういったものを先生方が効果的に使い、また教科書に準拠しているような教材もセットで出ていると思いますので、それには多少予算がかかるかもしれませんが、それを使うとより良い教育ができるということであれば、そういったことにご支援いただきますとありがたいと思います。
最後になりますけれども、ペーパーレス化ということで、今SDGsということが言われておまして、やはり地球に優しい、教育の中でもそういった持続可能性というのは大事だと思っております。まさにGoogleのClassroomを使って、そういった資料の配布等はアフターコロナもその後も効果的だと思いますので、続けて使っていくと良いと思っております。私からは以上です。

福田市長

ありがとうございました。貴重なご意見を、また後ほど皆さんからお聞きしたいと思っております。それでは、衛藤教育委員さんをお願いします。

衛藤教育委員

私は先日、小学校の卒業式と中学校の卒業式に行っていました。非常に短い時間の式でしたが、1年間に先生方が育てた子どもが、どのように育っているのかということ、卒業式の姿で一面を判断することができました。
私が行った小学校も中学校も、きちんとした態度で式に参加し、自分の持っている力を卒業式全体にぶつけて、式を精一杯盛り上げようという気持ちがよく伝わってきました。
このことは、教育委員会はもちろんですが、先生方の指導の結果だろうと思っておりますので、そのことで子どもの学びはできていたと思っております。
子どもたちから私が受けた印象は、コロナ禍ということでのいろいろな制限が加えられたり、いろいろな学校行事が中止されたりということで、日常とは違う体験や経験をいただろうと思っております。卒業式の様子は今までと変わっていないということから見れば、教育委員会の指導支援あるいはアドバイスがあったと思っておりますが、学校教育が行き届いていたということが伝わってきました。そのことが、学びの保障の具現化されたものと思っております。
コロナ禍における学びの保障ということをインターネット等で調べますと、文科省が事例を出しています。文科省がそれぞれの全国の小中学校に、指導助言を含めてパターン化されたものを表示しておりますが、これは今回取り入れら

れたのかお尋ねいたします。

また、今 iPad 等を利用して子どもたちがいろいろな学習をしておりますが、一斉授業とは違う側面が出てきたと思います。iPad を一人一人に持たせると、それぞれ個々人の課題がより鮮明に浮き彫りになってくるので、この子はどこがつまづいているか、この子は分かったような感じだったけど本当は分かっているしなかったなど、個人の課題が表面化してくると思います。その表面化した個人の課題については、どのように工夫改善して解消されようとしているのか教えてください。

また、hyper Q-U が実施されて今年で4年になると思います。非常に効果があるという話は聞きます。具体的にどのように効果があるのか教えてください。

次に、低位にいる児童生徒への指導の充実が課題と書かれています。これにつきまして、何かお考えがありましたらお聞かせください。

最後です。コロナの関係でどうしても感染対策に力を注がなければならなかった関係上、子どもと接する時間が少なくなったのではないかと思います。子どもと接するための工夫をどのようにされていたのか、お尋ねいたします。

福田市長

ありがとうございます。それでは、森課長お願いします。

森学校指導課長

まず1点目の文科省の資料を使っているのかということですが、もちろん資料を参考にはしておりますけれども、直接この資料を取り入れましょうという形では行っておりません。ただ、資料提示、情報提供等行う中で、学校が取り入れられるもの、それから工夫して変化させながら取り入れているもの、エッセンスを取り入れているものはあろうかと思います。

2点目です。iPad 活用により表面化した個人の課題にどう対応するかというところですが、様々な取り組み方があると思います。そもそも一人一台端末が導入される GIGA スクール構想の趣旨の中の1つに、個別最適な学びというところで、その子どもたち一人一人の学習ニーズに応じた支援をしていくところは掲げられていると思います。そして一人一人の課題に対し、これをどう取り上げていくかというところについては、大きく2つ考え方があると思います。1つは、授業の中でその子どもの考えを取り上げて、協働的な学びの材料にし、そしてそこでみんなで一緒に学習を深めていくという考え方です。それからもう1つは、やはり個別の対応になろうかと思います。iPad で具体的に出てきた子どもの課題に対して、例えば、それが学習理解、基礎的な理解に基づく部分であれば、やはり時間を確保しながら個別の指導を行ったりとか、そのような形で補充をしていくことが必要になると思います。それがもう

少し上の段階でならば、そういう段階の子どもたちに応じた教材を用意するなど、ここは本当に様々な対応の仕方が考えられると思っております。

それから **hyper Q-U** の効果についてです。**hyper Q-U** の効果は本当に様々なのですが、診断表では子どもたちの学級に対する満足度というものが挙げられます。1例を挙げますと、一見学級の中が非常に優秀で教員の対応も良く、とても良い状態で生活していると思われる子どもが、実は学級に対して十分に馴染めていなかったりとか、決して満足していない状態であるというようなところが、客観的に分類され示されます。また、どのような傾向の子どもたちが多いかということに対して、客観的な分析がなされております。例えば、あなたのクラスでは先生の働きかけが足りませんか、先生のもっと褒める活動が必要とか、規範意識が身につけていませんから、そこからまず重点的にやるべきですとか、具体的な指導助言が入ります。それらを基に、教員がどのように子どもたちに関わっていくか分かるようになります。例えば、ある学級では、夏休みに分析結果を基に管理職が担任との面談を行い、「この辺は良くできているね。」また「ここはもう少し改善して力を入れていこうか。」などと、具体的な指導をすることで、学級経営の改善につながってきております。これは **hyper Q-U** ならではの効果だと感じているところです。その結果、2回目の調査では、その学級の満足度が実際に上がったという調査結果も見られます。これも、やはり学級の状態によって様々な状況があるので、一概に「こういう効果ですよ」というのは言いにくいところではあるのですが、いま一例を申し上げたような形がいろいろな学級で大なり小なり見られると思っております。

それから、低位層の子どもたちが深い学びに入れるのか、または入れない子をどうしていくのかというところです。以前は、基礎と活用と言われていた時に、まず基礎が身に付かないと活用はできないでしょうという考え方がありました。私はそうとは思ってなくて、基礎が十分にできていない子も、その段階でのその子なりの活用の仕方があります。同じような活用を求めめるのではなく、今持っているものをどうやって使うのかというところが深い学びにつながる部分であろうと考えます。そう考えると、深い学びに一切入れないという状態は非常に少なくなってくるのではないかと思います。ただそれを実現するための教員のスキルや工夫は当然必要になりますけれども、そういう教員の工夫の中でより対応できている部分はあると思います。

また、そうは言っても、どうしてもそこまでも入れないお子さんももちろんおられます。その子たちに対しては先ほどの話になりますが、やはり個別の指導をやらなくてはいけないと思います。一斉の中で必ずしもその学習内容が入らない子どもさんもおられますので、その子たちを置いていかないためには、別

の時間をしっかり確保して、個別の学びをしっかりと与えていくということが大事だと考えております。

最後に、子どもと接するための学校の工夫ということですが、集会等で子どもたちが一堂に会するというのが非常に難しくなっています。また遊び等も、特に感染拡大期は密にならないということをより指導もされますし、休み時間を減らさざるを得ないということで、教員と子ども、また子どもたち同士の接触の機会が少なくなっているのが現状でございます。子どもたちのそういう部分での心理的な負担とか、調子やストレス等を軽減するためには、やはり教員が、まずは一人一人の健康状態や心理状態をできる限り把握することが必要であると思っております。

そのような取組は、実際に学校でも行われておりまして、例えば健康観察をいつも以上に時間をかけて、普段ですと名前を呼んで「元気です。」という返答のみで済むのですが、そこに一言添えたりとか、そういう小さなことですが、全員に必ずいきわたるような工夫を各学校で行っています。

休み時間や学級の活動で友達と何かをしようということも、やりづらい状況ではありますが、集団で遊ぶのが難しければ、担任が一人一人遊びに入っていて、少ない人数の中で一緒に教員が遊ぶという時間を多く作るなどして、直接触れ合うような時間を確保しています。このような取組はコロナが入った当初から各学校でも行われているところでございます。以上です。

福田市長

衛藤教育委員さんよろしいでしょうか。

衛藤教育委員

説明ありがとうございました。

やはりコロナ禍ということで、先生も子どもも、今までの日常と非常に違った体験や経験をしたと思います。コロナ禍によって、改めて見えてきた課題があると思います。コロナ禍がなかったならば見落としてしまった課題が、コロナ禍であったために見えてきた課題があると思います。そのことが、コロナ禍であらうと、コロナ禍でなかろうと大事な課題だと思います。その事に対する学校のそれぞれの取組がこれからも大事ではないかと思えます。

福田市長

ありがとうございました。それでは、佐野教育委員さんお願いします。

佐野教育委員

コロナ禍の学びの保障ということで、もうコロナになって3年経つわけでございます。災いばかりではなく、このICTのいわゆるiPadを使つての学習というのが、このコロナのおかげで一気にスピード感があり進んだのではなかろうかと思つているところです。

先ほどから各教育委員さん、それから課長の説明等にありますように、学力においては、そういった iPad や ICT のことを使った取組がかなりなされて、充実してきているということを理解しております。ですが、子どもたちの学習面の方ではなく、体力面が、いわゆる体育会、運動会も延期になったり縮小になったりということになるわけでございます。

そして、休み時間も削られ、そのような中で子どもたちの体力の低下が心配されるところでございます。中学校では、部活動の時間削減であったり、一番コロナが激しい時期には練習が中止になったりということになるわけでございます。いろいろな大会も中止になったり、延期になったりということで、目標を失ったり、練習もできなかつたりということがあられるわけでございます。

そのあたりの充実であったりということも、このコロナとはずっと付き合っていかなければならなさそうでございますので、そういった上で、いろいろな方法を考えていただいて、子どもたちの体力の向上、そしていろいろな人間関係の構築にいろいろな方法を考えていただきたいと思っております。

あと先日大きな地震が東北の方でありました。この北部九州は自然災害がわりと起こらない地域でございます。その中でも、やはり訓練というのが非常に大事なウエイトを占めるわけございまして、子どもたちの避難訓練だったり、そういった訓練を定期的に行っていたら、遠賀川の氾濫、それから津波の事だったり、地震がきたらこのようにすると、停電になったらこのようにすると、そういった危機になったときの活動がきちんとできるような指導をしていただきたいと思っております。以上です。

福田市長

ありがとうございました。

他に皆さん言い残したことはございませんでしょうか。よろしいでしょうか。それでは本日は教育委員の皆さんから、非常に素晴らしい助言をいただき、ありがとうございました。

我々が子どもの頃に見ていたアニメの世界が、今、目の前に広がっています。

「まさか」という時代です。衛藤教育委員さんにも僕の卒業式の VTR 見ていただいたと思いますけれども、子どもたちに「まさか」という坂があるよということを言った言葉があったと思います。今、まさしく「まさか」の時代になっているのです。「まさか」このようなコロナというものに対面して、どんなに科学が発達しようが、お金を持っていようが、世界中が目に見えないこんなに小さいものに翻弄されてしまう。そして、「まさか」戦争というもの目の前に起こるとは思わなかったことが起きてしまったり、あるいは「まさか」の災害がまた東北で起こったり、そういう時代だと思っております。

教育も同じだと思います。ある時代が動いているのだと思います。この「まさ

か」のなった時代にどう対応していくかが、これからの我々のホモサピエンスの生き残っていく術だと僕は思っています。ですので、今日の皆さんのご意見というのは、すごく前向きで、子どもたちのことをすごく考えていただいているということを私は市長としてつくづくありがたく思っております。

私個人としては、教育というのは、国語、算数、理科、社会だけではなく、一番の教育は何だと思ったときに、先ほど良いことをおっしゃいました。マスクをしていたら表情が見えない、マスクをしていたら笑っているのか、怒っているのか、舌打ちしているのか、舌を出しているのか分からない。人間って表情で相手の気持ちが分かったり、あるいは自分の感情を伝えたりするものではないですか。今はオンラインでマスクを外して、いろいろな表情を加工できたりします。なぜ流行っているのかと言うと、みんな表現したいのです。

自分の何か持っているものを表現したいのです。一生懸命に戦っているのだと僕は思います。あれを遊んでいるという大人がいるとしたら、それは大きな間違いです。そうすると、では勉強だけが勉強かということではなくて、私たちは、やはり人の温もりというか、手を繋いだり、ぎゅっと抱きしめたり、そういうことをするのが我々人間の一番の教育だと思っています。

ですから成績が良くなったから褒められる、あるいは分からないところを教えてもらって本当に温かくなる。でも、最後はやはり家庭、あるいは友達、先生、誰でもいいです。肌と肌の温もりをとにかく一日も早く取り戻すためにはどうしたら良いかということを考えつつ、今回先生も皆さんもゼロですから、元々コロナなんてやろうと誰も思っていないから、まさかオンラインでやろうと誰も思っていないから、ですから1つ1つ皆さんのご意見を伺って、教育長をはじめとして子どもたちに何を教え、そして何を学んで、その子たちが将来どのようなようになってもらえるか、衛藤教育委員さんのお話にもありましたように、卒業式での態度も非常に良かったと。これはありがたいことですよね。

これを更に温かみのある子どもたちに育ててもらいたいと、私はそういうふうには思っています。更にこれで終わりではありません。これは始まりです。新しい教育の始まりだと思っています。ぜひまた今後とも、厳しいご意見、そしていろいろなアイデアをワンチームで、みんな関係ないです。世界中が1つになってやっていくことを願って、簡単ではございますが私のご挨拶と意見とさせていただきます。ありがとうございました。

他にございませんか。それでは、船津教育部長にお返しいたします。

船津教育部長

福田市長ありがとうございます。

それでは、市長のことばにうつります。

本日の会議につきまして、一言おことばをお願いいたします。

福田市長 本日は本当にお忙しい中、ありがとうございました。本日は時間が限られておりますが、本当は2時間でも3時間でも、できれば朝まで皆さんのご意見を聞きたいところでございますけれども、やはり時間に限りがございます。本日は誠にありがとうございました。また、ぜひ一緒にいろいろな意見を聞かせていただきたいと思います。

船津教育部長 ありがとうございました。続きまして、教育長のことばです。片平教育長一言お願いいたします。

片平教育長 本日は、市長ありがとうございました。また教育委員の皆さんありがとうございました。

私はかねてから中間市の子どもたちの学力を高めるということ、これは最大の課題であります。私が教員になった時からとも言われ続けている言葉です。その学力というのは、往々にして狭義の学力、点数を上げればいいんだということをよく言われる人がいます。

私が言っている学力は違います。広い意味での学力、これは「知・徳・体」これが備わった統合された生きる力のことを言っています。

今もこの世の中を見ていると、先行きが全く見えない状況でございます。5年先、10年先、15年先、20年先どういう世の中になっていくのか全く見えません。そういった中で、今育てている子どもたちがどう生き抜いていくのか、生き抜いていけるのか、そういった生き抜ける子どもを育てなければと考えています。

やはりそういった意味では、「知・徳・体」の「知」の方はしっかり学校の先生方がそれぞれの学校で、先ほど課長が各学校の取組ということで説明されましたけれども、もっともっと大変な取組をされています。

グループに分けたり、成績順に分けたりして習熟別で放課後とか休み時間まで使って学習勉強を教えたりしております。そういったことで、随分学力を上げております。

そして「徳」でございます。

「徳」については学級集団づくりということで、かねてから教育相談について取り組んできております。今できる教育相談とは何か、チャンス相談なのです。ある機会を見つけて、その子に合った言葉かけをなさいよと。先生は私を気にかけているんだと、子どもに気づかせてくださいという取組をして、集団の中で心を育ててつながりをつけております。

また「体」については、やはり現在はコロナ禍で家庭でもストレッチができる

ようなそういったことを子どもたちや保護者の方にも伝えて体力を維持できるようにしています。そしてコロナが明けたら、おもいきり体を動かすことができるよう準備しています。

「知・徳・体」を統合された学力の育成に向けて取り組んでいるところです。実際に今までやってきたところは、今本当に子どもたちが芽を出しているのではなかろうかと思えますし、また教育委員さんの言われたとおり、このようなコロナ禍での学びもあります。コロナをどう乗り越えるか、どう生きていくか、どう戦っていくか、with コロナをどうするかというところ、そのような力も1つの学力ではないかと思えます。

そのような力が徐々についてきているのではなかろうかと思えます。

今日は教育委員さん、また市長からいろいろなお言葉をいただきました。それをこれからの学校教育に活かしていきたいと思えます。

私も早く子どもたちのマスクが取れた子どもたちの笑顔が見たいと、ただそれだけが今の私の願いでございます。どうぞ、今後も中間市の子どもたちの教育についてご理解ご協力をお願いいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

船津教育部長

片平教育長ありがとうございました。

それでは、これもちまして令和3年度中間市総合教育会議を閉会いたします。

[閉会時刻：14時15分]